

第4章 昔を今に伝える

新聞に載った先輩たち 語る戦争 戦後70年

予科練志願止めた言葉



1945年7月の七夕空襲の直後も学徒勤労動員は続いた。終戦の数カ月前からは富津市方面の山の中の地下工場にいた。数ヵ所あると言われた穴で、強制労働でつくられたと聞いた。

エンジンを分解、洗浄して、組み立てる作業をしていた。ある時、墜落したB29のエンジンが工場に運ばれてきた。分解してみると、日本の飛行機の誉(ほまれ)というエンジンとそっくりだった。ただ、米軍の部品は完成度が高く、安全性も高かった。電纜(でんらん)

堤 新一さん(86)＝千葉市若葉区 (21M)

と呼ばれたケーブルも米国の一つに束ねているが、日本のはバラバラの線を針金で束ねていた。動員されていた級友と『米国は合理的だ』と話したのを覚えている。

予科練を受けようとした時、同居していたおじさんが「やめろ。みんな『天皇陛下万歳』といって死ぬというがうそだ。死ぬ時はお母さんか、恋人の名前を言うんだ。だから、お母さんがお前にとっては一番偉いんだ」と言ってくれた。当時はその言葉が理解できなかったが、結局、背が足りず、行かずに済んだ。

(大和田武士)朝日新聞 2015.8.14

教育勅語ミスし殴られた



1943年、私は津田沼国民学校の4年生だった。当時、朝礼で指名された者が教育勅語を暗唱する決まりがあった。6月のある朝、指名された私は「チンオモウニ(朕惟フニ)ワガコウソコウソウ(我が皇祖祖宗)……」と始めた。途中で間違えた気がして「あっ、違っちゃった」と思わず口にした。周りはドッと笑った。

すると配属将校らしい教師が飛んで来た。「ふざけるな貴様、不敬罪だぞ！」怒鳴るなり、軍靴を改造した上履きでほおを殴った。口の中は血だらけになった。教育現場にまで軍国主義が忍び寄ってくる時代だった。

植草 光春さん(81)＝松戸市 (24併C)

我が家は津田沼の農家で、米や麦、サツマイモなどを作っていた。45年3月10日未明。西の空が真っ赤に染まるのを見た。東京大空襲だった。その翌日、東京から被災した人々が食料を求めてやってきた。父は「困ったときはお互い様。気の毒でカネなんぞ受け取れるもんじゃないよ」と備蓄した食料を渡した。

6月ごろ、津田沼を艦載戦闘機が襲った。家に機銃弾が撃ち込まれ、生け垣のマサキの枝が吹っ飛んだ。だが幸いにも死傷者はなかった。

8月15日。「終戦の詔書」がラジオ放送された。「殺されない日」が始まった。

(横山翼)朝日新聞 2015.8.8

富津試験場 兵器実験の「秘密施設」 遺構群保存で教訓に

多田 丈治さん(66)＝ (43C)

東京湾に細長く突き出る富津市の富津岬。現在は海水浴や陸上選手の合宿で人気のスポットだが、敗戦まで、銃砲の性能を実験する陸軍の秘密研究所「富津試験場」が存在した。岬にはコンクリート造りの遺構が今も点在しており、うっそうとした雑木林にたたずむその姿は、70年を経て忘れ去られつつある戦時下の記憶を今に伝えている。

兵器の性能という軍事機密を扱う秘密研究所。当時、周囲は有刺鉄線で囲まれ、「立ち入りまたは撮影模写を禁ず」と警告する立て札があり、実態はベールに包まれていた富津市富津で船舶機器の製作所を営む多田丈治さんは、81年に69歳で亡くなった父の忠治さんが、技術者として勤めていた。敗戦直後の8月上旬に富津に上陸した米軍が、試験場の機器を破壊した状況をメモに残し、当時の様子をよく丈治さんに話していた。

戦後は機器を買取り取って製作所を立ち上げ、漁網の巻き上げ機などに改造。父から工場を引き継いだ丈治さんは、現在も試験場で使われた41年製の卓上ボール盤を愛用する。

丈治さんは「無線の内容で負けることは分かっていたようだが、秘密は一切外に言えない状況だった。(当時の事を)。何とか私に伝えたかったのでは」と推し量る。

父が、国や家族を守るために働いた痕跡ともいえる遺構群は、風化が著しく、その存在を知る人は少なくなっていた。丈治さんは「掘り起こして戦争の反省に生かしてほしい」と願っている。

(かずさ支局武内博志)千葉日報 2015.8.23



富津試験場で使われた卓上ボール盤を今も使う多田さん＝富津市

千葉「闇市に立つ少年」 七夕空襲生き抜いた石井さん「それは私」…平和訴える

石井 進さん(23E) 東京新聞千葉版 2015年(平成27年)7月6日



前列右の軍服を着た少年が石井さん
(千葉市制施行70周年より)

焼け跡の闇市にポツリと立つ軍服を着た少年。一九四五年、二度の空襲で焼け野原になった千葉市の中心街が復興の兆しを見せた写真として市史などに繰り返し登場する少年が、同市稲毛区の石井進さん(八五)であることが分かった。四五年七月七日の空襲、戦後の混乱期を生き抜いた石井さんは、戦後七十年を迎え二度と戦争を繰り返してはいけない」と平和の大切さを訴える。(砂上麻子)



70年前に写真を撮られた千葉銀座通りを歩く
石井さん——千葉市中央区で

千葉市は六月十日と七月七日、米軍による大規模な空襲を受け、中心市街地の約七割が焼け野原になった。死傷者は約千六百人、被災者は約四万人に上

った。七月七日未明、石井さんが市内の自宅で床に就いていたら、空襲警報がけたたましく鳴った。一度解除され、うとうとしていた時に空襲が始まった。

自宅の防空壕に入ったが、一缶掘れば地下水が出てくるため隠れるほど深くない。雨のように焼夷弾が降り注ぐ中、近くの神社へ逃げ、両親、弟と離ればなれになった。「あちこちで火の手が上がり、逃げるのに必死で家族のことも考えられなかった」夜が明け、家族を捜し始めたが、道路にはトタンをかぶせた死体があちこちに横たわっていた。親戚から父親が近くの豆腐店にいると聞き、何とか両親と弟に再会できた。自宅は跡形もなかった。

写真は、千葉市が市制五十年(七一年)を記念して市史を編さんする際、市民から提供され、その後新聞などにも転載された。

写真を見た石井さんの若いころを知る友人から連絡を受け、自分だと分かったが、公表はしなかった。

昨年、千葉市で開催されていた千葉空襲と戦争のパネル展を訪れた際、写真が展示してあり、主催した市民団体の関係者に初めて打ち明けた。

石井さんに写真を撮影された時の、はっきりとした記憶はないが、市の資料によれば、撮影は四六年秋ごろ。石井さんは当時十七歳、工業学校の四年生で、千葉駅(現東千葉駅)から間借りしていた知り合いの家に帰る途中、撮影場所の今の千葉銀座通り(中央区)付近をよく歩いていた。

道ばたには魚や野菜を売る闇市が広がる。「空襲で焼け野原になった市内でもいち早く人の流れがもどっていた」と振り返る。軍服は軍から払い下げられたもの。制服代わりに「当時は、ポツダム宣言受諾を受けて、みんな『ポツダム服』と呼んでいたんだよ」と笑った。

銀座通りには今、ビルが立ち並び、戦争の面影はない。石井さんは「戦争は仕掛けた方が負け。若い世代は戦争の悲惨な歴史を学んでほしい」と話した。

昔を今に伝える